英国における共用水道遺産の立地と再利用に関する研究

Property of Location and Reuse of Public Water-Tap Heritage in Britain

岡田 昌彰[1]

[1]正会員　博士(工学)　近畿大学教授　理工学部社会環境工学科(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1)

E-mail: okd@civileng.kindai.ac.jp

英国においては、各地に水道ポンプや飲用噴水，馬水槽などの「共用水道施設」が多数存在している。これらは主に19世紀に整備されたもので、1859年に「ロンド水槽協会」が設立されて以来、4000基を超える飲用噴水や数千にも及ぶ水道ポンプが整備された。本研究では、英国全土において2010年より現地調査を実施し、224事例の立地特性ならびに利活用状態を精査し、廃止されるも地域住民の愛着を得た旧水道施設の諸特性を明らかにすることを目的とする。

Key Words : *Great Britain, Heritage, Public Water-Tap, Drinking Fountain, Waterpump*

1．研究の背景と目的

英国においては、各地に水道ポンプ(Village Pump, pant）や飲用噴水（Drinking Fountain），馬水槽（Water（または Cattle）Trough）などの「共用水道施設」が多数存在している。これらは主に 19 世紀に整備されたもので、1859 年に「ロンド水槽協会」補注(1)（Metropolitan Drinking Fountain and Cattle Trough Association）が設立されて以来、4000 基を超える飲用噴水や数千にも及ぶ水道ポンプが整備された。

これらの殆どは水道機能を失った後も現存しており、既にイングリッシュヘリテージなどのオーソリティによってグレード II 以上の歴史的モニュメントに認定されている。また Richard Williams[1] や Marilyn Symmes[2] らによってその歴史的経緯に関する優れた調査・研究も行われている。イングリッシュ・ヘリテージによる National Monuments Record にて各事例の概要がアーカイブ化されているが、一方で立地都市（あるいは、町村）における各ポンプの立地の特徴や現存状況，利活用の実態については明確な調査は存在していない。

本研究では、英国全土において 2010 年より筆者が実施している現地調査によって抽出した 224 事例を対象とし、その立地特性ならびに利活用状態を精査し、廃止されるも地域住民の愛着を得た旧水道施設の諸特性を明らかにすることを目的とする。

2．共用水道施設整備の概要[3) 4)]

19 世紀に至るまで、ロンドンのテムズ川は水質に大きな問題があり、未処理下水やごみ、工場廃水によって汚濁するのみならずコレラ菌をも含んでおり、市民生活に重大な支障を来たしていた。一方、市民が無料で得ることのできる飲用水は不十分であり、この状況は公衆衛生上の大きな課題となっていた。1851 年に開催された世界初の万博「第 1 回ロンドン万博」当時の「パンチ誌」（英国の絵入り風刺週刊雑誌。1841 年 7 月 17 日創刊，1992 年 4 月 8 日号をもって廃刊）には、「ロンドンに飲める水をグラス 1 杯作ることができる者は、博覧会全体で最良かつ全世界的に最も有用な陳列品の出品者に相当する」とも記述されており、ロンドンの飲用水事情がいかに深刻であったかが伺える。

1858 年には社会科学振興協会誌における衛生整備の記事が国民の大きな関心を呼び、銀行家であり慈善家でもあったサミュエル・ガーニー議員(Samuel Gurney M.P）はこれに応え、1859 年に前述の「ロンドン水槽協会」を設立した。ヴィクトリア女王の夫君アルバート公も協会の目的に深い関心を示したほか、カンタベリー大主教など数々の著名人らが協会を支持した。その後協会は 800 基もの飲用噴水と馬水槽を整備し、19 世紀末には夏季に 30 万人もの人々が飲用噴水を利用、さらに 1 基の馬水槽によって 24 時間あたり 1800 頭の馬を賄うに足る水を供給することが可能となった。

その後施設は地方自治体に移管され、維持されながら飲料水を供給し続けるが、近代水道の普及によりその機能は次第に失われていく。

3．共用水道遺産の現況

英国に整備された旧共用給水施設の多くは、

写真１　Queen Victoria Jubilee Fountain (Rutland, 1887)

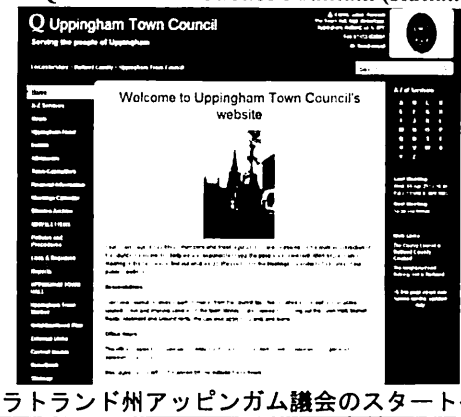

図１ ラトランド州アッピンガム議会のスタートページ

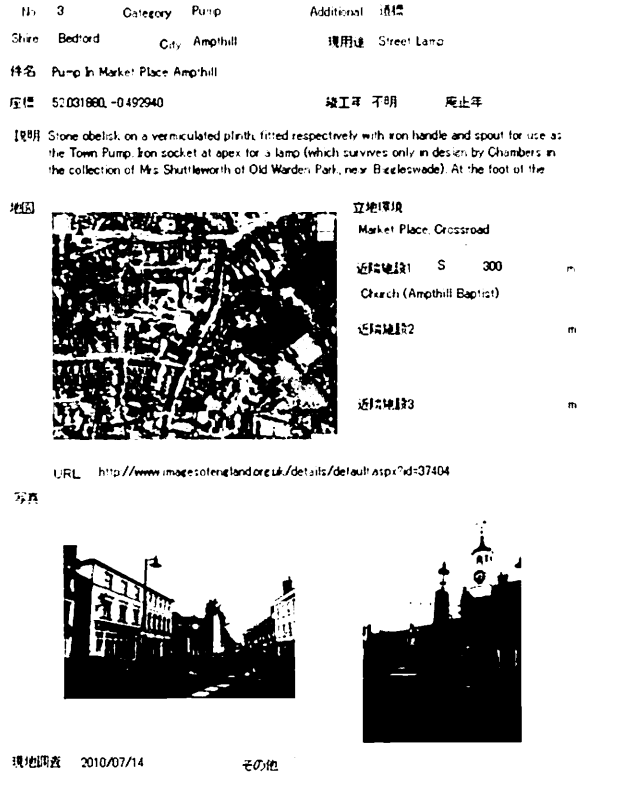

図２　共用水道遺産データベース

上水道の普及によって水道機能を失った現在もなお、地域のアイコンあるいは用途転用による新たな役割を担う施設として現存している。例えば、土木学会誌 2012 年５月号でご紹介したラトランド州アッピンガムにある「クイーン・ヴィクトリア・ジュビリー・ファウンテン」（1887 年竣工：写真１）は町議会のスタートページを飾っている（図１）。竣工後 150 年を経、水道機能を喪失した現在でもこれらが地域住民にこれほどの愛着をもたれている要因はどこにあるのか？国民性の相異という通説に頼らず、その要因を明らかにしてみたい。

本研究では、前述の 224 事例をもとに「共用水道遺産データベース（Water-tap data-base）」を作成した（図２）。ここでは、位置，外観，カテゴリー（ポンプの有無）の基本情報に加え、(1) 立地環境の特徴，(2) 主なコミュニティー中心からの距離，(3) 当初から与えられていた付加的機能（東屋，時計台など），(4) 現在の再利用状況　を加えた。

(1) 立地環境の特徴

初期の飲用噴水の多くは、教会やパブの近くに設置されたとされているが [2]、ここには飲用噴水に宗教的な意味が添えられていたことに加え、自ずと市民が集まりやすい位置を選定していたことが推察される。この過程のもとに現地を観察すると、立地環境には以下のような特徴があることがわかった。

a) マーケット広場

英国の都市部あるいは小村にもマーケット広場 (Market Place) が存在するが、ここに立地するものが数多く存在する（写真 1)。

b) Village Green（コモンズ的空間）（写真 2)

Village Green と呼ばれる、かつてのコモンズあるいはそれに類する緑地に立地するものが見られる。

c) ヘタ地・交差点

Village Green の形成過程にも関連すると考えられるが、交差点やヘタ地に立地するものも多い。

d) コミュニティー中心近傍

教会や市役所のほか、地域の小規模な学校などの近傍に立地するものが多数存在している。

写真２ Village Green 立地例：West Wratting Village Shelter and Waterpump (Cambridgeshire, 1887)

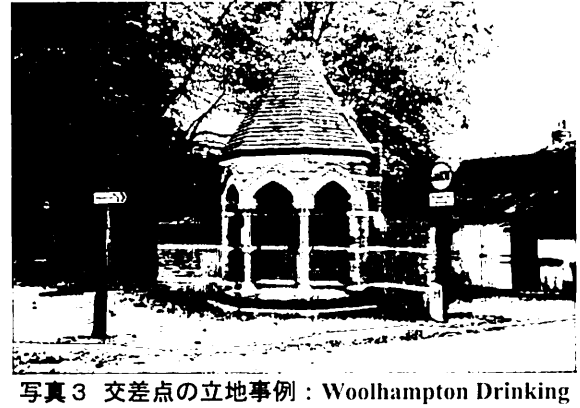

写真３ 交差点の立地事例：Woolhampton Drinking Fountain（Berkshire, 1897）

写真 4 コミュニティー中心近傍の立地事例：
上）学校：Wymondham Waterpump（Leicester, 1856）
下）教会：Waresley Village Punm and Drinking Fountain
（Cambridgeshire, 1856）

e）その他

牧師館やマナーハウスの入口ゲート付近，橋詰，沿道のポケットパークのほか、市役所建築と一体化しているものなどの立地パターンが確認された。

（2）付加的機能

（1）のような地域センターに立地しているものの中には、ガス灯（写真 1)や東屋（写真５），時計台（写真６）が併設されているものが見られる。

（3）現在の再利用状況

水道機能を失った現在は単なるモニュメントとしてそのまま現存しているものが殆どであるが、花壇や道路標識の支柱などとして再利用されているものも見られる。20 世紀初頭に道路標識が加えられたとの記録のある事例もあるが（写真 7）、一方で当初から道路標識とともに一体的に構築されたものもある（写真 8）。一方、花壇についてはかつての水槽部（写真 9 上）あるいは共用水道施設の上屋全体（写真 9 下）が利用されていることがわかった。

３．外観のバラエティー（写真10）

1843 年から 1966 年にかけて発刊された英国建築雑誌「Builder」においては、英国内に設置された飲用噴水について、その美しい外観がイラストとともに定期的に紹介されている。協会はデザインの「パターンブック」をも不定期に発刊していた[2)]。

外観は装飾の少ない実用主義なものから古典主義的なものまでバラエティーに富んでおり、18 世紀後

写真 5　東屋の併設事例：Boroughbridge Market Well
(North Yorkshire, 1875)

写真 6　時計台の併設事例：Heath and Reach Village
Pumphouse and Clock Tower (Bedfordshire, 1873)

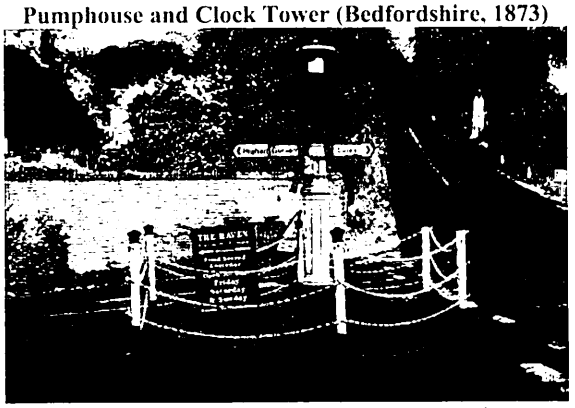

写真 7　道路標識支柱としての再利用例
Hexton Village Pump (Hertfordshire, 1846)

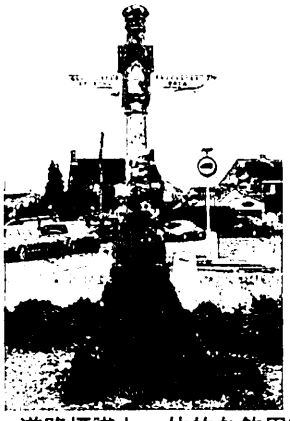

写真 8　道路標識と一体的な飲用噴水：
Eastington Memorial Direction Post
With Drinking Fountain (Glocester, 1897)

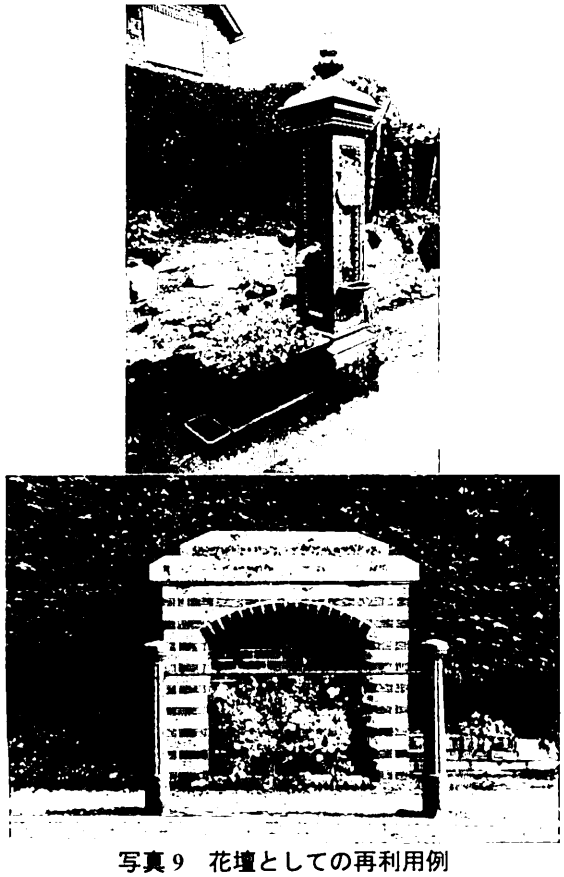

写真 9　花壇としての再利用例

上）Stanton By Dale Village Pump (Derbyshire, 1897)

下）Housing For Former Village Tap (Glocester, 19c)

写真 10　バラエティに富む個性的な形態

左上）Alderbury Memorial And Water Trough (Wiltshire, 1902)

右上）Shrewsbury Water pump (Shropshire, 1880)

左下）Shildon Drinking Fountain (Durham, 1914)

中下）Shipton Under Wychwood Drinking Fountain (Oxford, 1878)

右下）Hawkesbury Pump And Trough (Gloucester, 19 世紀半ば)

半から 19 世紀にかけて興ったゴシック建築の復興運動「ゴシック・リバイバル」の影響を受けているものもある。これらには寄付者の財力や趣向が反映されていると言われている[2)]。

4．おわりに

本研究では、英国における共用水道施設の立地と利活用現況を、いくつかの典型的な事例とともに明らかにすることを試みた。今後はこのデータベースをもとに、3章で示したいくつかの立地要素による統計的な分析も実施する必要がある。

本稿で紹介した共用水道施設は日本においてもきわめて身近な存在である。例えば新宿駅前には 1906 年にロンドン市より寄贈された馬水槽（実際は飲用噴水と考えられる）が現存しているほか、明治 20 年創設の横浜水道でも獅子頭の共用栓が英国から輸入されており、市内随所に存在していた[補注(2)]。それだけに、本稿における「地域遺産」として尊重され続けている英国の事例に鑑みれば、わが国における近代共用栓の殆どが散逸し、元の位置に現存している事例が皆無に近いという現状は惜しまれる。

共用水道施設が市民のアクセスしやすい場に設置され、さらに機能を失った後もそれが「アクセス」しやすく、さらにユニークで美しい外観をもっていたが故に、市民にはきわめて身近な存在となり愛着をもたれ続けてきたことは、構造物が立地地域に同化していく過程を考察する上でも極めて興味深い。しかし、水道施設の存在意義はそれだけに止まらず、それが公衆衛生ひいては人々の生活あるいは生命そのものの維持に果たした役割の大きさがその重要な要因となっているはずである。英国の場合はそれが一部宗教と結び付くことで人々の心を確実に捉えたことも事実だが、その背景にあるのは近代土木技術に対する感謝の気持ちと、それを達成した先人の偉業に対する敬意、そして彼らの子孫であることに対する素直な誇りがあるのではないだろうか。我々日本人がこの事例から学べることは、デザインの秀逸さのみならず、先人の偉業を尊ぶ現代人のきわめて常識的な姿勢であるように思えている。

補注

(1) 正確には「都市飲用噴水馬水槽協会」となるが、東京都が 1906 年にロンドン市から馬水槽の寄贈を受けた際には「ロンド水槽協会」と訳されているため、本稿ではこの先例を尊重した。

(2) 現在は横浜水道記念館や山梨県道志村の村役場前に一部が展示されているのみである。また、2013 年 3 月に埼玉県秩父市において同形の共用栓を確認したが、2013 年 4 月時点で詳細は不明であり、調査中である。

参考文献

1) Richard Williams(2009)Village Pumps, Shire Publications Ltd

2) Marilyn Symmes (1998) Fountains: Splash and Spectacle: Water and Design from the Renaissance to the Present, Thames & Hudson

3) Charles Dickens, Jr. (1879) Dickens's Dictionary of London

4) The Drinking Fountain Association: http://www.drinkingfountains.org/ (2013.4/5 現在)